山形南高（山形一中・二高）東京同窓会報

第十二号
平成27年11月14日発行
千代田区平河町2―6―3
山形県東京事務所内
山南東京同窓会事務局
発行人　毛利　昭
編集人代表　小松　栄三郎

山形南高東京同窓会の発展を期して

山形南高東京同窓会
会長　毛利　昭

我らが母校は昭和16年に山形県立第二中学校（生徒定員750名）として創立している。当初は小白川町の小学校（元市立六小）を仮校舎として開校したが、翌年には現在の東原町の地に校舎を新築して移転している。昭和23年に山形県立山形第二高等学校（生徒定員750名）と改称し、昭和25年に男女共学の山形県立山形南高等学校（生徒定員1500名、後に900名）と改称し現在に至っている。

平成27年は山形南高等学校同窓会も発足以来70年を迎える年になり、5月には同窓会総会が「原点回帰」なるスローガンの基に盛大に挙行されている。併せて同窓会名簿の編纂が行われ、希望者には年度中に手元に届くことになっている。この様な輝かしい実績を持つ同窓会の「東京支部」として、平成14年に発足したのが「山形南高東京同窓会」である。便宜上東京と銘打ってはあるが、会員は関東地区に在住する方々をもって組織する同窓会となっている。

この度、第14回目の山形南高東京同窓会の総会を開催するに当たり、本会を設立すると共にその発展に寄与されてきた先人の方々のご苦労に心より感謝申し上げたい。省みれば、平成14年11月に第1回となる設立総会がホテルグランドパレスで開催され、以来13年にわたり幹事諸兄の献身的なご労苦を得て発展を続けてきた会である。これからは先輩諸兄の情熱を受け継ぐと共に、心細い思いで上京してくると思われる後輩諸君を励まし、勇気付ける組織へと発展させていきたい。

その為には、それぞれの思いや各種スローガンも考えられるが、その基本は同窓会組織の安定的な運営と情熱である。高校生活僅か3年と言う短期間の在籍であり、人生におけるほんの一時の縁ではあるが、多感な時期を過ごした学び舎への想いは共有したいと思っている。

当然、組織の維持・運営には人手と資金が必要なのは当たり前である。現在は10期生を筆頭に40期生までの幹事諸兄が手弁当で同窓会運営に携わっている。幸いなことに都道府県会館の山形事務所の協力も得られ、郷土の絆を感じているところであるが、資金源の確保がままならず、設立当初よりの資金も枯渇する恐れが生じている。このため会報の印刷をカラーから白黒に落としたり、対外的な出張にも個人負担をお願いしたりと支出抑制に努めているが、組織運営に必須とされる会報や議案書等の印刷、更には郵送料等は極限に達しているのが現状である。

この窮状を打破するためには、会員諸氏からの会費納入の促進しか考えられない。現在、東京在住（含関東）者で住所の判明している方々は約2000名に留まっている。およそこの二倍はこの地区におられるはずであるが確認出来てはいない。更に、会費納入者は200名程度と低迷している。これでは毎年の赤字は必須である。せめてこの倍の納入者があれば組織は持ちこたえられるのである。早晩の解散を回避するためにも会員諸氏にご高配をお願いする次第である。権威ある会報にこの様なことを記載するのは恥ずかしい話であるが、窮状を訴え同窓会の発展を期した文面としてご容赦願いたい。

東京大空襲、慰霊堂を訪ねて

山形南高同窓会
会長　佐藤　充彦

太平洋戦争の終結を告げた昭和天皇による「玉音放送」の原盤が8月1日初めて公開されました。70年の歳月を経て、原盤が公開された意義は大きなものがあります。

戦争体験者が年々減少している中で迎えた戦後70年、各地の慰霊祭は高齢者が目立ち、若い人たちに「二度と悲惨な戦争に巻き込まれないように」と強く訴えていました。

東京同窓会の会員の皆さんは、70年前の東京大空襲を体験された方は居ないと思いますが、各地に点在す